

和歌山県内の中学校における 交流学習の実態と教師意識に関する調査

An inspection of the actual situation and teachers' consciousness
about exchange learning in junior high schools in Wakayama

窪田恵津子（和歌山大学教育学研究科）

Etsuko KUBOTA

野中 陽一（附属教育実践総合センター）

Youichi NONAKA

和歌山県内の中学校において、どのような形態、内容の交流学習が実際取り組まれているか、またそれは生徒たちのどのような力を育成することをねらいとしているかについての具体的な調査記録は現時点では見当たらない。本調査は、県内の交流学習の実態と、それに関わる教師の意識に焦点をあてて、交流学習のねらいをより具体的にすることを目的とした調査である。またその際、その地理的条件から交流学習が継続的に取り組まれている可能性の高いと考えられるへき地中学校に焦点を当て、へき地校の課題との関連性を考えた。あわせて、近年導入が進められている情報機器の利用との関わりも考察することを試みた。

キーワード：交流学習 へき地教育 情報機器利用

はじめに

高度情報化時代の到来のうねりの中で、生徒たちを取り巻く生活環境、教育環境にも様々な情報があふれてきている。また、情報を取り扱う機器やメディアも徐々にではあるが使いやすくなり、頃なものになってきて、情報機器を利用した交流学習も増加している。そのような学習の中で、人と人とのつながりの意味や価値というものが、あらためて注目されている。

そして特にへき地中学校では、少人数であることや生活環境から、生徒は限られた人間関係の中で多くの時間を過ごす状況である。それゆえ、従来、交流学習が多く取り入れられている。へき地生徒にとって交流学習がもつ意義が、へき地以外の生徒とどのように違うかを中学校教員の意識を通してせまってみようとする。また、へき地中学校での交流学習における教師のねらいや視点を整理してみようとした。

1. 調査の目的及び方法

本稿では、中学校で従来実施されてきた直接出会う交流学習と近年増加してきた情報機器を利用した交流学習の実態と、それにおける教師のねらいや学習効果（教師から見て生徒についたと

考えられる力)を調査し、教師の視点を明らかにしたい。その際、交流学习を学習活動に多く取り入れている可能性の高いへき地中学校の状況を軸にしたい。そして今後、交流学习の効果を増すための教師の留意点について考える礎としたい。

へき地校では、はやくからさまざまな校外の人々との交流学习がなされているが、近年情報機器を使った交流学习の取り組みが増えてきた。文部省でも平成7年以降、本校と分校、同一町内の学校間、山や島の学校と陸、都市の、学校間にマルチメディアを媒体として、教科学習、道徳、特活の交流学习実践研究校12校(へき地指定校等)研究協力校11校(都市の学校等)を委託による継続研究等がつみ重ねられてきている。和歌山のへき地中学校では、このような大掛かりな取り組み例はまだない。しかし、パソコンでメール、TV会議等を利用した交流事例はここ数年少しずつ見られるようになってきた。

そこで、従来の情報機器を使わない交流学习と、近年行われ始めた、情報機器を使った交流学习ということに分けて、交流学习がどの程度、どのように実施され、でどのような力が育つことをねらい、また育ったと考えているか、教師意識を中心に調査した。

調査方法としては、教員へのアンケートを実施した。

調査地は和歌山県、調査対象は、県下公立全中学校(へき地校35校、へき地以外の一般校108校)の情報担当教員<143名>及び、へき地校授業担当教員<243名、情報担当者除く>である。

なお、アンケート内容は、『学校のインターネット接続について』<質問用紙①>と、『交流学习について』<質問用紙②>の2種類であり、<質問用紙①>については、情報担当者のみ<質問用紙②>については調査対象全員に回答を依頼した。質問用紙①、②は本論文の最後に記載したURLに載せている。

調査期日については、2000年9月3日に送付し、10月下旬までに回収、集計した。

アンケート全体について回答回収率は、情報担当教員で、へき地校以外の一般校では59.3%、へき地校は60.0%あった。へき地校授業担当教員は38.5%であった。

なお、結果の表については、基本的に情報担当教員の回答を示しており、一部に、へき地校授業担当教員の回答を付け加えて検討した。

2. 自由記述に関する分析

自由記述の中で、情報機器を利用した取り組みについての課題について検討したいと思う。

まず、基礎学力の低下につながるのではという危惧、生の交流の必要性、交流の継続性の問題、手間や時間がかかる割に効果が少ないのでは、という意見が出されている。このあたりが学習の仕方や教師の授業作りでの工夫の要るところであると考えられる。

次に、機器の不足や予算、回線の高速化の問題は今後の改善が予想されるが、人の問題、特に教師の研修の問題は深刻である。現状では、情報担当や、一部の情報機器に通じている教師に多大な負担がかかっており、このままでは情報化は推進されない。一方で多くの教師が、技量を身につけたいが、日々の校務等に追われて学習の時間が取れないと感じている。ここ10年ほどの間に急速に一般化した情報機器であるが、かつて教師になる時には学んでこなかった、機器に慣れていない教員にとっては、使いこなす、日々の授業実践に取り入れるとなると、まだまだワンタッチでというところまでいっていない機器には難度感がある。子どもたちに情報活用能力をつけていくことを考えても、現職の教師にパソコン等情報機器利用研修のまとまった時間を保証するこ

とが望まれる。

教育の情報化という側面から、具体的な情報機器利用の実践事例をたっぷりと紹介し、機器利用の有効性や可能性を示し、教師の自己教育力へ働きかける必要がある。

学校教育に情報機器を有効に利用するためには、教員の自己研修が必至であるが、学校現場そのものの雰囲気や研修の推進や効果に強く作用すると考える。予算獲得や研修への管理職の熱心さや理解、職場の研修のための複数の情報化推進リーダーのチームやネットワークが今、求められている。

3. アンケートの考察

3. 1 ヘキ地生徒の交流する力の課題

表1で、現在の勤務校において、生徒は他校の生徒と比較して全体的に人との交流に関わる力に課題があるかという問いに対し、情報教育担当教員を対象にしたものでは、一般校では「特有の課題はない」が31.3%に対し、ヘキ地校では同23.8%であった。あわせて、「個人差はあるが多少課題があると思う」もしくは、「特有の課題があると思う」と答えた教員は、一般校64.1%であるのに対し、ヘキ地校では76.2%であった。

表1 生徒の交流に関わる力における課題の有無

		課題なし1	多少課題2	課題あり3	その他4	無回答	課題を感じる2+3
一般校	人数(人)	20	37	4	0	3	41
	割合(%)	31.3	57.8	6.3	0.0	4.7	64.1
ヘキ地校	人数(人)	5	13	3	0	0	16
	割合(%)	23.8	61.9	14.3	0.0	0.0	76.2
ヘキ地校 授業担当	人数(人)	31	59	12	1	4	71
	割合(%)	29.0	55.1	11.2	0.9	3.7	66.3

表2 交流に関わる課題の内容

交流する力 課題 選択肢	いろいろ な情報を 集める力	人の考 えを批 判する 力	物怖じ せず誰 とでも 話す力	人の話 を聞き 理解 する力	集団の 中で協力 して取り 組む力	思いやり やさしさ 等情意 面	相手にわ かるよう に発表す る力	集めた情報 から必要な 情報を選び 取る力	伝えたい 情報を整 理して 表す力	その他
一般校%	24.4	24.4	34.1	46.3	36.6	7.3	63.4	26.8	34.1	2.4
ヘキ地校%	31.3	31.3	68.8	18.8	25.0	6.3	68.8	37.5	31.3	0.0
ヘキ地校授業担当%	23.6	37.5	59.7	29.2	25.0	6.9	56.9	29.2	30.6	1.4
			◎*	◎	◎		*	◎		

*は50% 以上の教員が課題を感じるもの

◎ は10%以上の差があるもの

このことから、ヘキ地中学校生は交流に関する力に何らかの課題を抱えていると考えられ、教員もそれを意識していることがうかがえる。

また、自分の予想と違ったのは、一般校でも5人中3人以上の教師が、生徒の人との交流に関

わる力に課題を感じているという結果から、へき地特有というばかりではなく、現在の中学生は一般的に人との関わる力の何らかの課題をもつと教師が考えていることになる。

しかし、表2からわかるように、一般校で教員が感じている課題と、へき地校で教員が感じている課題は違う傾向をもつことがわかってきた。

表2から、一般校では「人の話を聞く力」や、「集団の中での協力」といった、集団の中での活動過程での課題傾向が見られる。へき地校では少人数の固定した集団の中での活動が常態であるへき地特有の、自分たちの集団以外の人たちとの交流に慣れておらず、「物おじせず誰とも話をする」というような積極的態度、自信をもって堂々と取り組む姿勢が育ちにくいという土壤があると考えられる。また、同時に小グループのような構成員の中で「人の考えを批判する力」が育つ切磋琢磨する状況を経験する機会がほとんどないことも関係していると考えられる。

よって、へき地校には環境から来る特有の交流に関わる力においての課題が傾向としてあると考える。

また、一般校、へき地校の共通課題項として、「相手にわかるように発表する力」があげられている。ひとつには、思春期の中学生がもつ自意識への敏感な反応という側面が考えられるが、私はもうひとつ“相手にわかるように言う必要がある”という状況の経験の質と量もあると思う。よく知った仲間内では、今更、細かく説明するのは“格好悪い”という意識がはたらくのではないかと感じる。

自身の勤務経験からへき地校では、生徒会活動や特別活動で、学校外部の人と話す時それ相当の“説明の必要な”状況では、生徒たちはそれなりに工夫をしたり、しっかりとした行動も、端々に見ることができた。

これはアンケート結果を別の角度から見たときに言えることだが、へき地校では、一般校に比して「人の話を聞き理解する力」「集団の中で協力して取り組む力」を課題と感じる教員が27.5%と11.6%少なかった。このことは、裏を返せば、一般校に比してへき地校では、そのような力が割合とついており、教員も課題として意識することが少ないということになると考える。

これはへき地のもつ“小集団をじっくり育て、互いの存在価値を認め合う”ことの環境的特性であり、良さのあらわれであると考えられる。

3. 2 情報機器を用いない交流学习についての考察

表3の情報機器を用いない交流学习の対象から判断して、地域にいて、地域の歴史や文化にふれあう目的と、高齢化社会の中でお年寄りと積極的に接していき、知恵をいただいたり、人のつながりを実感する学習がねらいとされていることが多い。また割合として、中学生同士の交流が25%であったことは、日頃、経験することの少ない同年齢集団との交わりへの期待がうかがわれる。

表3 交流学习の対象

対象	地域の 人々	地域の お年寄り	障害を持 つ人たち	中学生	幼・保・小 ・高校	その他
一般校 %	35.7	26.2	14.3	11.9	9.5	2.3
へき地校	12.5	37.5	18.8	25.0	6.25	0.0

また表4から、この情報機器を用いない交流学习で育った力として、一般校でも、へき地校でも「物おじせず誰とでも話す力」「集団の中で協力して取り組む力」「思いやりやさしさなどの情意面」が、大きな割合を得ている。

そこから考えてもやはり、場の設定の必要性を感じる。中学生に限らず、人は、できればいろいろな人と知り合い、情報交換したり、共に何かをしたり、教えてもらったり、その人の表情や気持ちを知ったり、自分の気持ちを伝えたいという願いをもっている。場の設定や演出がかみ合えば、実のある学習をすることができる。“物おじせず誰とでも話す”というへき地校の課題を、この活動において克服することが可能であると考ええる。

「思いやりやさしさや情意面」では、へき地校のみならず一般校では、75%近くの教員が「活動により育った」と考えていることは、日頃の教科等の学習では、達成しにくい側面の力を交流学习が育てていると考えるのが適切であろう。

表4 情報機器を使わない交流学习で育った力

育った力	いろいろな情報を集める力	人の考えを批判する力	物怖じせず誰とでも話す力	人の話を聞き理解する力	集団の中で協力して取り組む力	思いやりやさしさ情意面	相手にわかるように発表する力	集めた情報から必要な情報を選び取る力	伝えたい情報を整理して表す力	その他
一般校%	12.9	3.2	61.3	35.5	64.5	74.2	19.4	9.7	9.7	0.0
へき地校%	0.0	0.0	66.7	25.0	83.3	58.3	25.0	0.0	8.3	8.3
へき地校授業担当者%	7.4	0.0	40.7	25.9	53.7	61.1	20.4	0.0	5.6	5.6
			*		*	*				

*は50%以上の教員が課題を感じるもの

また「集団の中で協力して取り組む力」のへき地校での80%以上の割合は注目に値する。へき地校生は日頃から、お互いの性格や、得意なものなどを幼少の頃からの付き合いで知り抜いている部分が多いと考えられる。そのような状況で、普段の学校生活では、ごく当たり前のように微妙なバランスを保ちつつ過ごしている。このバランスが崩れ、誰かが輪の外に出てしまったり、出されてしまったりすると、関係修復は困難を極める。お互い常に一緒に小集団であるから、気分転換や、他のクラスや他のグループとつきあって外から状況を見るという、「世渡り」のようなことができないという環境である。

集団としてそのような危機的状況を、程度の差はあるものの多少は経験してきている中学生は、学校外の人との交流という場において、そのような今までの“確執”のようなものをさておいて、互いをよく知るという特性を生かし、潜在的な力が発現する場となり、集団として協力できるのではないかと私は考える。このことを、もう少し発展的に捉えると、へき地中学校で学級集団として、まとまりを欠いたり、お互いが疎遠になっているクラスほど交流学习は団結、協力の道具としても有効に働く可能性をもつのではないかと考える。

広い視野を持つこと、目先や自分の周りのことばかりに気をとられていず、いろいろな角度から物を見たり、客観的に考えることの経験が、へき地校生には必要である。それは、自分たちのもつ問題から目をそむけるということにはならない。身の回りで起こっていることを身の回りの感覚だけで処理することができ取まれば、それはそれでよい。行き詰まり、方法が手詰まりな時、

外から客観的に見るような経験が、解決を見出せるひとつの方法だと考える。

そしてそれこそ、へき地校生がもつ課題の克服につながるのではと考える。

3. 3 情報機器を用いた交流学习についての考察

表5から、一般校でもへき地校でも機器あり交流経験はまだ少ない。表6より実施されている中では、機器あり交流は一般校へき地校とも「伝えたい情報を整理して表す力」が育ったと感じ、一般校ではさらに「集めた情報から必要な情報をえらび取る力」「相手にわかるように発表する力」「いろいろな情報を集める力」「集団の中での協力」の割合が高くなっている。

表5 情報機器を用いた交流学习の経験の有無

一般校%	14.1	64校中9校
へき地校%	28.6	21校中6校

表6 情報機器を用いた交流学习で育ったと考えられる力

	いろいろな情報を集める力	人の考えを批判する力	物おじせず誰とでも話す力	人の話を聞き理解する力	集団の中で協力して取り組む力	思いやりややさしさ等情意面	相手にわかるように発表する力	集めた情報から必要な情報を選び取る力	伝えたい情報を整理して表す力	その他
一般校%	33.3	0.0	22.2	0.0	33.3	11.1	55.6	44.4	55.6	11.1
へき地校%	0.0	0.0	33.3	0.0	33.3	16.7	16.7	16.7	33.3	0.0
	◎		◎				◎*	◎	◎*	◎

*は50%以上の教員が課題を感じるもの

◎は10%以上の差があるもの

またへき地では、「物おじせず誰とでも話す力」や「集団の中で協力して取り組む力」といった機器の有無が特に影響するといえないと考えられる力について若干であるが、育成につながっているととらえられている。これは、多くの人との関わりの機会の少ないへき地生徒が、とにかく交流学习を経験することで、行動の取っ掛かりになっていると考えるられる。また一般校でも課題となっている「集団の中での協力する力」が、交流学习で育つきっかけを作っているのではないかと考えられる。

表7から情報機器を利用する利点で「距離の克服」が50%前後あったことから、“遠く離れた、なかなかいくことのできない場所、地域、人々”に居ながらにして関われることは、それだけで夢のあることであり、好奇心を掻きたてられる。あの地域はこんな時どうなっているのだろうかとか、その地域の人々の考えや文化を知るといった知的側面のみならず、情報機器の利便性の発見や、使ってみたいという意識にもつながっているのではないかと思う。そのことは、「情報活用能力を育成できる。」と考えている教員が、一般校・へき地校共35%前後と言う数字にも表れている。

表7 情報機器を利用する利点

	同じ年代の生徒と交流がしやすくなる	距離の克服	交流するための時間の短縮	交流相手や機会の増加	情報機器を利用することへの興味関心	情報活用能力を育成できる	特に利点なし	その他
一般校%	9.4	48.4	20.3	39.1	34.4	34.4	0.0	3.1
へき地校%	14.3	52.4	9.5	23.8	19.0	38.1	0.0	0.0
へき地校授業担当者%	16.8	47.7	12.1	31.8	25.2	31.8	0.0	0.0
		*	◎	◎	◎			

*は50% 以上の教員が課題を感じるもの

◎ は10%以上の差があるもの

また一般校では、「情報機器を利用することへの興味関心」が、34.4%であった。このことは、一般校の教員はへき地と比べ、情報機器利用そのものへの関心、いわゆる情報活用手段・道具としての情報機器に期待を寄せる部分も少し高いのではないかと考えられる。

それから、アンケート前には、「同じ年代の生徒との交流がやりやすくなる」がへき地では高いのでは、と予想していたが、一般校に比し、若干高いにとどまり、全体として、同じ年代との交流を特に意識して活用していない、言い換えれば、異年齢集団との交流もそれなりに善しとしているのではないかと考えられる。

また、「交流するための時間の短縮ができる」という選択肢も、予想以上にへき地では、低い数字であった。これは、現在の情報機器の使い勝手の状況や、打ち合わせ等の手間、時間を考えると、「時間短縮」と言い切れない状況にあると考えられる。

3. 4 情報機器を利用した取り組みの課題についての考察

表8より、情報機器を利用した取り組みを妨げる要因は、一般校、へき地校とも「情報機器・周辺機器の不足」を50%前後の教員があげている。今後の政府の教育の情報化関連施策とあいまって、機器の不足は解消されていくとは考えられるが、「機器の取り扱う知識技量に課題がある。」という面の割合の高さ（特に一般校）は、今後の研修（公的、校内、私的）が、必要である。

また、情報機器を利用した取り組みをするための「そのような時間的余裕が無い。」ということとは、どういうことを意味するのか。ひとつは、情報機器を利用するにあたり、技量や、機器に不慣れなための不安の問題がある。あえて、そのために時間を割いて、取り組むほどの余裕が無い、ということが考えられる。また、時間を割いて取り組む効果への期待より、現在のやるべきことの方が優先するという優先順位がつけられているということも考えられる。もうひとつ、特に中学校では、日々の教科指導、クラブ・チーム指導、生徒指導などの間をぬって、会議を取る時間調整も難しいという状況がある。一般校に、特に「そのような時間的余裕が無い。」という割合が高いのを考えても、日々の仕事に忙殺されており、じっくりと機器の使い方を研修してなどとは言っていないということが考えられる。

表 8 情報機器利用妨げの要因

	妨げる要因 は無い	機器の取り扱い 知識技量に課題	周囲の理解 が得にくい	そのような時間 的余裕が無い	情報機器・ 周辺不足	機器使いの 勝手が悪い	その他
一般校%	6.3	51.6	10.9	46.9	50.0	9.4	3.1
へき地校%	0.0	38.1	4.8	38.1	47.6	4.8	0.0
へき地授業担当%	3.7	60.7	1.9	35.5	27.1	8.4	0.9
		◎ *			◎ *		

*は50% 以上の教員が課題を感じるもの

◎ は10%以上の差があるもの

このような状況の中で、現状の勤務体制を維持したままの研修は、一体どのような形態になるのかと考えると、行き詰まりを感じてしまう。

特に、「知識技量に課題がある。」とわかっていながら、「時間的余裕が無い。」割合の高い一般校では、この問題は深刻であり、“すべての生徒の情報活用能力育成を”（情報化の進展に対応した初等中等教育における情報教育の推進等に関する調査研究協力者会議）というねらいを達成することに対して、大きな問題であると考ええる。

3. 5 交流学习における情報機器利用の意味の考察

表9からここで、「全く別物で関係を考えにくい」という意見に注目したい。へき地校情報担当者でも9.5%であったが、交流学习の中にも、情報機器を利用した学習とはなじみにくいものがあると考えられるのではないかと。回答者の意識が、お年寄りや園児、障害をもつ人たちとの交流に焦点があたっている場合このような意見になるのではないだろうか。

表 9 情報機器を利用した交流学习としない交流学习の比較

情報機器を利用した 交流学习は、従来の 交流学习に対して	妨げるもの	全く別物で 関係を考え にくい	発展的に 利用でき るもの	新しい可能 性を開くも のである	わからない	その他
一般校%	0.0	12.5	54.7	60.9	6.3	0.0
へき地校%	0.0	9.5	33.3	47.6	0.0	0.0
へき地校授業担当%	0.0	8.4	43.0	43.0	7.5	2.8
			◎ *	◎ *		

*は50% 以上の教員が課題を感じるもの

◎ は10%以上の差があるもの

同時に、交流を『仲間のひろがり』をもとにとらえれば、新しい交流相手、交流の仕方の工夫という観点で「発展的に利用」、「新しい可能性を開くもの」という考えにつながっているのではと考えられる。またお年寄りや、障害者との交流の紹介や報告の媒体、メールの交換としての機器利用という観点で考えれば、「発展的に利用」できるという考えにも通じることが考えられる。

一般校、へき地校とも最も割合が高かったのは、「新しい可能性を開くものである」という考えである。情報機器利用は、今までに無い新しい取り組みとして、従来の交流学习にはない可能性を教師は感じている。新しい可能性としてあげられるものは、表6で挙げられた情報機器を利

用する利点と、重なり合ってくると考えられる。すなわち、交流相手との距離が克服できると、気候風土や考え方の違う人々との交流が可能になるという点、そして情報活用能力を育成できるという点が挙げられる。

3. 6 二つの視点と三つのねらい

従来、へき地ではへき地課題克服のための交流学习が多く実施されてきた。その部分はこれからも変わらず、むしろへき地での生徒数の減少と地域の高齢化は進む一方であることを考えれば、以前よりましていろいろな人々との交流が望まれているといえてよい。

そこで、ここで交流学习を学校の教育課程の中へ取り入れてきた教師としての意識の背景をこれらのアンケートの結果をもとにして考えてみることにする。

私のへき地中学校勤務経験から考えると、従来の交流学习を積極的にすすめてきた目的と、情報機器を利用して交流学习を進めていこうとする目的は、人と人とのつながりを育てようというねらいは似ていても、全く別なねらいもあるように感じられる。具体的にいえば、学習により生徒につけさせたい力をどの方向からつけたいと願っているかの視点が別である傾向があると感じられるからである。

これは、アンケートの結果の表3でへき地校の情報機器を用いない交流対象が地域のお年よりに多いこと、表4でそれにより結果として育った力として「思いやり優しさ等情意面」が表10の情報機器を用いた交流学习を大きく上回っている（30%以上）ことを考えても従来の交流学习が、情意面をより重視して実施されてきたと交流学习だといえ、情報機器を利用した交流学习は、表10、11、12からもわかるように情意面よりも情報活用能力育成への期待が大きくなっていることから裏付けられるのではないかと考える。

表10 情報機器を用いた交流学习で期待する力

	いろいろな情報を集める力	人の考えを批判する力	物怖じせず誰とでも話す力	人の話を聞き理解する力	集団の中で協力して取り組む力	思いやり優しさなど情意面	相手にわかるように発表する力	集めた情報から必要な情報を選びとる力	伝えたい情報を整理して表す力	その他
一般校%	22.2	0.0	22.2	11.1	11.1	11.1	66.7	33.3	55.6	0.0
へき地校%	33.3	0.0	33.3	0.0	33.3	16.7	50.0	16.7	50.0	0.0
	◎		◎		◎		◎ *	◎	*	

*は50% 以上の教員が課題を感じるもの

◎ は10%以上の差があるもの

表11 情報機器を用いた交流学习で育ったと考えられる力

	いろいろな情報を集める力	人の考えを批判する力	物怖じせず誰とでも話す力	人の話を聞き理解する力	集団の中で協力して取り組む力	思いやり優しさ等情意面	相手にわかるように発表する力	集めた情報から必要な情報を選び取る力	伝えたい情報を整理して表す力	その他
一般校%	33.3	0.0	22.2	0.0	33.3	11.1	55.6	44.4	55.6	11.1
へき地校%	0.0	0.0	33.3	0.0	33.3	16.7	16.7	16.7	33.3	0.0
	◎		◎				◎ *	◎	◎ *	◎

*は50% 以上の教員が課題を感じるもの

◎ は10%以上の差があるもの

表12 情報機器を利用していないへき地校授業担当者の情報機器利用交流学习でつくと予想する力

	いろいろな情報を集める力	人の考えを批判する力	物怖じせず誰とでも話す力	人の話を聞き理解する力	集団の中で協力して取り組む力	思いやりやさしさ等情意面	相手にわかるように発表する力	集めた情報から必要な情報を選びとる力	伝えたい情報を整理して表す力	その他
該当数	60	3	6	9	2	0	34	58	50	1
該当%	61.2	3.1	6.1	9.2	2.0	0.0	34.7	59.2	51.0	1

ここで、私の考えとしてへき地中学校での交流学习をそのねらいや教師の視点から整理してみたいと思う。へき地においてまず生徒の豊かな経験の必要性から交流学习を考えたときに、中心にくるものとして、教科であればその教科目標である。また、交流により新しい知識や知恵を得たり直接体験することが核になる。そしてその周辺もしくは裏打ちしたり、もしくは見えないが主たる目標として、交流学习は大きく分けて教師の二つの視点と三つのねらいから考えられているのではないかと考える。

ひとつは道德教育からの視点である。交流学习を「他の人との関わり」「集団や社会への関わり」を基盤にして、人間愛の精神や他の人への感謝や思いやり、また地域社会の一員としての自覚や先人・高齢者への尊敬、感謝をねらいとして行うのは、道德教育としての視点である。

もうひとつは、情報教育としての視点である。

情報教育からの視点を考えたとき、ねらいとなるのは、情報機器を利用し、情報活用能力を育てようという視点でのひとつの学習方法として交流学习を考えているという場合もある。その場合は情報収集、選択、処理、まとめて伝えることそのものが、学習のねらいとなる。

情報教育のもうひとつの視点は、情報機器を利用したネットワークを活用するということである。人と人がつながり、ともに生き、活動することを学ぶことである。そして、人と人、人や物、事、現象のつながりを考える中で、情報を収集したり、選択、処理、まとめて伝えるという作業をする。ゆえに、その視点から、情報機器を利用した有効な学習形態として、交流学习が考えられているのであると考える。

生徒の交流に関わる力としての「思いやりや優しさ等情意面」は人としての感性に関わるものである。この部分は、中学校学習指導要領（平成10年）の、道德の内容のところで主として他の人とかかわりに関することとして、温かい人間愛の精神を深め、他の人々に対し感謝と思いやりの心をもつこと、主として集団や社会とかかわりに関することとして、地域社会の一員としての自覚をもって郷土を愛し、社会に尽くした先人や高齢者に尊敬と感謝の念を深め、郷土の発展に努めること、主として他の人とかかわりに関することとして、温かい人間愛の精神を深め、他の人々に対し感謝と思いやりの心をもつことという部分に合致してくる。

3. 7 交流学习における教師のねらい～実感を基調にした交流学习のねらいと情報活用能力

先の論文（窪田2001）で表した『実感を基調にしたねらい』で「仲間がいる実感」「仲間が広がる実感」を基調にする活動のタイプは、情報機器を利用した取り組みに結び付けやすいのでは

ないだろうか。この活動のねらいは、表3で情報機器利用の利点とされた「交流相手との距離の克服」「交流相手や機会の増加」とびったりと重なってくる。

「ぬくもりの実感」を基調とするものは情報機器を利用した学習とはなじみにくいのではない。ホームページを作りその活動を紹介することは可能であり、実際にも存在するが、多くは、対象となったお年寄りや、地域の方々へは作成の報告のみで、むしろ自分たちの活動を不特定多数の人々や他の学校の児童生徒に見てもらおうという意図が主になっている。

そのこともプラスして、交流学习で期待される 情報活用能力は、仲間の存在を実感し、仲間を広げていく実感と連携し、あいまって、より豊かに育てられると考えられる。

おわりに

教師の意識から考えられる中学生の交流課題については、一般校で「人の話を聞き理解する力」や「集団の中で協力して取り組む力」といった集団活動過程での行動課題が見受けられたのに対し、へき地校で「物おじせず誰とでも話す力」に突出して課題があることがわかり、へき地独特の課題であることが見受けられる。

情報機器を用いない交流学习では、「物おじせず誰とでも話す力」「集団の中で協力して取り組む力」「思いやりやさしさ等の情意面」の力が育っていると考えられるのに対し、情報機器を用いた交流学习では、情報選択、表現、整理、発表という情報活用能力が育成されているという判断がなされている。

そして交流学习については、教師の多方面からの視点とねらいが絡み合って実施されている。交流学习で期待される情報活用能力は、仲間の存在を実感し、仲間を広げていく実感と連携し、あいまって、より豊かに育てる事ができるのではないかと考える。

へき地中学校で生徒たちの学習の支援をしながら常々へき地独特の課題を感じていた。純粋さや真面目さをもちながら、大きな集団に接したとき、全く自分の意志を表明できなくなりその良さも発揮できなくなってしまう。これを学習活動の深まりの中で克服していけないだろうかという思いがあった。そのための交流学习に着目した。

従来の交流学习のもつ意味、広がりつつある情報機器利用の交流学习の意義付けの必要性を感じ、アンケート調査をし、本稿をまとめる中で、へき地中学校での交流学习の教師のねらいと視点を整理してみた。

交流学习は情報機器利用の有無によって、学習の目標は似ていても異なる視点から実施していることを意識して、生徒の学習過程を支援していくことが、学習効果をより高めることにつながるのではないだろうか。

引 用

・窪田恵津子 (2001) 「和歌山県へき地中学校の交流学习の一考察～実感を基調にした活動の視点から～」 和歌山大学教育学部「学芸」

*尚、この論文の元である具体的な調査結果は、「和歌山県中学校交流学习の実態と教師意識に関する調査」として、<http://www.naxnet.or.jp/~kbt/kouryuu/kouryuu.htm>、に掲載している。あわせてアンケート調査用紙①、②についても載せている。本論文はこの調査結果の一部

をまとめたものである。